

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 41 号

発行日

2024.12. 15

編集・発行

井上講四／堂本彰夫

※連絡先

〒901-2225

沖縄県宜野湾市

大謝名 3-13-24

教育協働研究所

～岳陽舎～

(井上講四宅)

Tel:098-963-9282

E-mail:

gakuyou17@outlook.jp

○「光る君へ」で想ったこと!!

明日(15日)で、今年のNHK大河ドラマ「光る君へ」が終わる! 煌びやかな平安貴族の世、主人公の紫式部(まひろ)と大権力者藤原道長との妖しげな? 男女関係を軸にして、本ドラマは展開してきたわけであるが、まさに、かの『源氏物語』は、そのような人間関係を生々しく描いたものであったというところであろう(直接読んだことはないので分からないが?)!! これまでの作品とは違うという、大方の評があつたようであるが、「大河」自体が、昨今の新しい河の流れ? の中で、その存在意義を模索したということでもあろう(大石静という脚本家が、それに応えたということか?)!! 私には、それについては、これ以上何も言うことはない(あくまでもエンタメであり、時代や登場人物の「大河性?」には、それほど拘りはない?)、今回は、予期せぬ情報を得たことだけは記しておきたい! 言わば、新しい知識ということであるが、それは、天皇や貴族達の暮らしぶりということである。特に、書き物を巡る(読む)天皇や貴族達(女御を含む)の言動が面白かったが、書き物と日常の連続性(否、一体性?)がそこにはあつたということである(本来、そういうものかもしれないが?)。これは、新しい発見である!!

他にも、幾つか想うことはあるが、ここでは、天皇の存在悲哀? みたいなものに触れておきたい。ただし、ある意味では、そのことは今日まで続いていることなので軽々には言えないが、そういう人間(お上)が、国の存続にとって、哀しい程に必要であつたということである!! 「統治」と「祭祀」の間(妙?)にあつて、自らの意思ではどうしようもない人生を送る! そういう存在であつたということである!!

○慢心は、常に忍び寄ってくる?

話題としては、かなり過去のものとなつたとは思われるが、過日、野球のプレミア12が終つた! 残念ながら、日本チームは、それまで8戦全勝と、無敵の戦績を残し、改めるとの台湾との決戦(三度目)に臨んだわけだが、無残にも、0対4で完敗してしまつた! もちろんスポーツのことであるので、余程の力の差がなければ、まさに勝つたり、負けたりのこととなるが、何故か、この試合は、後味の悪いものであつた!

と言うのも、試合前の、ベンチ前でのご勢上げ? の様子が、試合中に流されたが、そこでの選手達の雰囲気、優勝するのは当たり前だ! というような塩梅に見えた! もちろん、リラックスのための盛り上げではあつたろうが、口上を述べていた選手の軽さ? に、私は、甚だしい違和感を抱いた! そして、案の定、負けた! もちろん、そのこと自体が、負けの原因だとは思わないが、どこかに奢り、高ぶりがあつたことは間違いないであろう!

要は、慢心は要注意ということでもあるが、本当に優勝したか? 勝つたならば(したか? とは思うが?)、謙虚にかつたか? たかに試合に臨まなければならなかつたということである!! 余計なことだが、その時に、誰か一人でもそのことに気付き、みんなに告げていたならば、どうなつていたか? 折角のムードを壊したくなかつたということもあるが、そこが、どうであつたのか? 一方の、台湾の方は、その一戦にかけていた(お金も!)! その違いは大きかつた? でも、選手達は、大きな財産を得た! 慢心は、禁物であることを!! だが、監督は分かつていた?

○「国社研」の変わりよつ! その先を知りたかつた!

過日(11月30日~12月1日)、日本生涯教育学会第45回大会があつた! もちろん、私は、ズームでの参加であつたが(もう何年も前から)、今回は、とても面白い発表を聞かせてもらった! なかでも、私が、35年前後に勤務していた国立教育政策研究所社会教育実践研究センター(当時名:国立社会教育研修所/愛称「国社研」)の発表には、とても驚かされた! まさに、隔世の感、ここにありということであつたが、その取り組みには、甚大な意義と可能性を感じさせてもらった!

と言うのも、ここでは、現在「Brain」(ぶらーり)。上野」というものが行われており、これまでは、調査研究や関係者の研修だけで、その機能を果たしてきたセンターが、その枠を取り外して、近隣の人々や学校(高等学校)と協力して、新たな役割を構築しようとしているからである! 折角の機会でもあつたので、少し質問をさせてもらおうと思つたのであるが、時間がなくて、結局は出来なかつた(非常に残念である)!

要は、その取り組みが、いわゆる「国策(総合教育政策)」として、どのように波及していくのか? ということであるが、単なるセンターの生き残り策で終わるのではなく、同センターの研究・研修事業に、どう生かされるのかということである! ちなみに、そこ(地域学校協働活動)での大きな課題は、かの「教育課程」にどう絡ませるかということであるが、それが、うまくいかなければ、学校側にとっては、負担の大きいものとなる(しかも、現在、その学校側は、かの「働き方改革」の真の只中であつて、そうしたヴィジョンを失おうともしている?)! だから、社会教育側が、どんなに熱意をもって協働、協力を呼び掛けても、迷惑な話となる!! そのことを克服するためにも、この動きは重要なのだ!

ということ、今回の学会参加では、改めて、様々な情報提供や示唆を受けた! 現役をゆうに退いた身ではあるが、この恩恵? を、是非とも、今付き合っている人達に伝えたい方はない(特に沖縄の人達に! 主として「教育協働アカデミー」を通じて!)! そしてまた、その辺りのことを、広く「新・教育協働への道」で語っていくことにしたい(自腰脚を気にしながら?)!

(井上)

○「馴れ合い」と「折り合い」の「相合傘」？重ね傘？ ○今年の「新語・流行語大賞」に「ふてほど」！

久し振りに、外食(昼食)を兼ねて、馴染みの散髪屋さんに行つた！その帰り道で、何故か、「馴れ合い」と「折語・流行語大賞」に「ふてほど」が決まったそうである！「馴れ合い」の、それぞれの意味と違いのようなものを考えていた！まさに、まったくの暇高齢者ではあるのであるが、支報告書不記載など、…一方、昨今強化されているのがコだが、その伏線みたいなものは、一応あった！それは、最近平ライアンス。企業は顧客・株主への社会的責任はもち近の、度重なる選挙(内外を問わず)の結果であるが、その人、従業員一人ひとりにもハラスメントだ、働き方改革れぞれのリーダーを選ぶ際に、そこには、いずれも「馴れだ」と配慮が求められる。集団優先、滅私奉公で経済成長時合い」と「折り合い」の奇妙な関係があるということである。代を生きた昭和世代にとってはまさにタイムスリップする！もちろん、理想的には、「折り合い」だけの方が良いたかのような激変…「この、昭和の時代に置いて行かれわけであるが(最初から全責一致の結果はあり得ないし、あつた感を笑い飛ばしてくれたのが金曜ドラマ『不適切にもほたしたら、それ自体が、逆に危険なところ)、いずれにしてどがある！』昭和の主人公が令和の社会で堂々と昭和のルール、人の道の原理原則を貫いて令和のルールに疑問符と今、その関係が、気になって仕方がないのである！！」道を投げかけながらも、対話することで物事を解決していくと今、その関係が、実は、「馴れ合い」を實現(維道を探る。時代がいつであれ、不適切なことは不適切なもの持するためのものがあるような気もするからである！！)もだど教えてくれる。「10月に行われた衆議院選挙、〇〇し、残念ながら、ありそうである。しかし、その「相合傘」の選挙公約が「ルールを守る」。〇〇方の公約がこれ。不否、重ね傘？に嫌気がさし、その傘の中に入らない(入り適切にもほどがありませんか?)という「皮肉」も！たくもない？人も、多いのである！それが、秩序の維持(安定)に寄与しているとも言えなくはないが、そこには、本当に必要な変革や発展は望めそうにない！！得をする人はとことんそうなるし、そうでない人もまた、とことんそうでないことになる(格差社会の増大)！！

・慢心は 残念ながら やつてくる？
それを制すが 真の仲間!!

・時代は変わった!! されど変わらぬものがある!
それも気づけば すぐ傍には !!

・「馴れ合い」? 「折り合い」?
ただ重ね傘?なら 「相合傘」とならず?

・「ふてほど」と 何でも略す それ自体!
不適切とは 思わないのかな?

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕④

○改めて、古代九州の全体像を探る―その12―
しかるに、後著「分國」は、おそろしく、新羅系の「葛城氏」や「秦氏」等が共闘して造り上げた「豊國保國」(筑紫保國の分國)後の「秦王国」中心は田川地域や宇佐を経て、近畿に移動?である。そして、彼らの正当性(この場合は、これである)の根拠を示したのが、かの「武烈天皇」の悪逆ぶりであらうということである(あまりにも慎重に、推測である)↓
易姓革命だから、当然それは推定である。ただし、そこは、書紀のみの記述(古事記は、それ自体には同調していないことか?)!!

すなわち、彼(武烈天皇)は、「応神王統」の最後の王とされ、その継嗣がなかったために、応神5世孫の「近江または北陸から招かれた」継嗣「あたかも継体したかのように?」示されたのである。だが、この皇統の承継物語は、明らかにおかしい!一つは、出身地(九州と近畿、北陸の二重存在)、一つは、「継体」の本身(本当は九州(倭國)王統の継体?)ということである!もちろん、二人の継体がいるはずもなく、そうであれば、そこには隠された真実(トリック?)があることは間違いないのである!

そこでヒントとなるのが、その事績に被せられた虚実が、そこにはあるということである。かの武烈天皇の在位期間とその結末である!!しかも、かの「筑紫磐井」が、倭の五王の最後の「武」の後裔であったとしたら、それは、かなり蓋然性の高いものとなる(例の「松野連素直」によると、「武」の次は「瀧」(賢)→「別系」(稲負)→「家系」(と)と続いているが、「哲」(賢)が、その「磐井」と考えられている。そして、その後は「一地方豪族に墮している」!!

ただし、それは、かの武烈の在位期間(496~506年)と合わない!!だから、「磐井」は、「武烈」ではない!!であれば、そこには、さびなるからくり(嘘?)があることになる!!それが、記紀が示す(通説に言ふ)「継体天皇」との関係ということになる!!彼の在位期間は507~531年であるが、武烈の薨去が506年とされているわけだから、当然でつながら、問題は「継体」年号であり、その創始年(515年)である(明らかに、ズレがある)!!なのである(だから消されてもいる)!!(つづく) (堂本)

〔編集後記〕まさに、光陰矢の如し!あつたという間に、残り半月となった!宮崎への旅も無事終わり(孫達は、それぞれ遅く帰って来たが、親達は大変そうであった!)、再び、いつものようなパソコン生活に戻つた!沖繩も、随分寒くなつてきた! (井上/堂本)